

## 国際理解講座「大学生が見たフィリピン～語学留学とボランティア活動の経験から」

昨年、日本語教室木曜日クラスに大学生のボランティア盧俊悟(のじゅの)さんが入会されました。HIFでは大学生のボランティアは珍しく、教室活動への積極的な参加はとても喜ばしい事でした。その後盧さんからフィリピンのセブ島に語学留学をすると伺ったため、「日本に戻ったら体験談を話してもらえないか」とお願いしたところ、ご快諾をいただけたことで今回の理解講座が実現しました。盧さんから「自分は語学留学だがフィリピンでボランティアをする友人がいるので一緒に話をしても良いですか。」との相談があったため、今回は盧さんと丸茂光樹さんのおふたりによる講座となりました。

2月10日当日は、外国の方5名を含む30名の参加があり、会場のスペース105は満席となりました。盧さんのタイトルは「大学生が見たフィリピン」。語学学校の時間割は朝6時40分から夜の8時35分までぎっしり詰まっており、まさに英語漬けの日々を過ごされたことがわかりました。初めは正しい英語を話さなくては…というプレッシャーや、上手に英語を使う友人と自分との比較から苦しい時期があったそうですが、その苦しさを打破した時のことをパズルとレゴに例えて説明してくださいました。お話には参加者の皆さんも感銘を受けたようです。英語をパズルと考えてしまうと、正しい位置に正しいピース(言葉)をはめ込まなければ文は完成しない、でもレゴのようなものだと考えれば、自分の手持ちのブロック(言葉)を組み立てながら話せばよく、それに気がついたことで自分を縛っていた「正しい英語を話さなければ」という意識から解放されたということです。盧さんはセブ島で初めての海水浴やマリンスポーツにもチャレンジされ、今回の留学は自分への最高の投資だったと清々しく語ってくださいました。帰国し再開された日本語教室の活動については次のような言葉で表現されましたのでそのまま紹介します。「学習者が『日本語を話す自分』を好きになれて、安心感のある、そして、一步踏み出す自信がつくような時間を作っていく。」

次いで登壇した丸茂さんはフィリピン・セブ島のスラム街の様子やそこで生きる人々の暮らしをたくさん写真と共に紹介してくださいました。セブ市内にある貧困地域 Lus(ルス)で行ったボランティア活動は住民が希望する衣類の配布を行うもので、好みのシャツをもらって嬉しそうなおとなや子どもの顔がスライドの中にありました。私たちが驚いたのはセブ最大のキャラータ墓地。墓地内では100世帯の人々が暮らしており、墓石の前で遊びぶ子どもやそこで営まれる日常生活の風景が紹介されました。セブの中心街にある Lorega(ロレガ)は麻薬の取り引きが行われている犯罪の多い地域とのこと。そこでは子ども達とリレーや玉入れ、ペインティングなどで一緒に遊んで楽しむボランティアをされたそうです。日本人から見ればギリギリの収入で暮らしを立てている人々ですが、そこにはたくさんの笑顔があり、丸茂さんのカメラのファインダーを覗いたり、おんぶや抱っこをしてもらう子どもたちはみんな笑顔で、元気な笑い声が聞こえてきそうな写真がスライドに溢っていました。丸茂さんからは「心は貧しくない 幸せとは何か」という問い合わせが話の締めくくりにあり、参加者の心に残るメッセージとなりました。